

最後の「おまえの母さん、おおでべそ」あたりは、はやし歌の定型「おまえの母さん、でべそ」と同じものだ。定型のはやし歌というのは不思議なものだ。はやしたてているわりに、悪意がストリートに相手の胸に突き刺さることはない。人それぞれだから、どの程度胸に突き刺さるかはわからない。が、相手が見たこともない、もしかしたら自分だって見たことのない「母さんのでべそ」のために、はやされて死を選ぶものはいないだろう。

そういえば、むかし、ぼくのむすめが姉妹で口げんかをしてきたことがあった。下のむすめが「おまえの母さんでべそ」といい、姉も対抗して「おまえの母さんでべそ」といっていた。まだ、学校にあがるかあがらないかぐらいの姉妹の言い合いを、ぼくがあきれながら聞いていたら、とつぜん、ウチの女房が大きな声で「やめなさい。ふたりとも！」といった。二人は自分たちが言い合っていた中身の方に、一瞬で気づき沈黙し、口げんかはおわった。

定型の悪口というのは、そういうものだろう。アッコも、べつに怒りもせずに「ばっかみたい」と笑う。そのときの、ミナのとらえ方が、おもしろい。

ミナは今まで、こうして若本たちがいじめるからアッコは学校へこなくなつたのだ、と思っていた。でも、そうじゃない。みんなは乱暴なやり方で、アッコにもどつてくる

ようによびかけている。アッコを拒否しているのはナベセンであり、学校そのものなのだ。

若本たちのはやし歌を、いじめではなく、乱暴なやり方でよびかけているという。この語り方に、ぼくは、一瞬めまいのようなことばのゆらぎを感じる。若本たちの行為は、どう見てもほめられたものではない。一見して悪ガキの悪ふざけだ。このマイナスイメージのことばを、きどは「いじめ」ではなく「よびかけ」というプラスイメージのことばにおきかえる。そこに、ゆらぎが生まれ、微妙なズレがうまれる。その感じが、ぼくは好きなのだ。

じつをいうと、ぼくは「いじめ」とか「スクールカースト」ということばが、大嫌いだ。八六年の中野富士見中葬式ごっこ以来、「いじめ」は子どもについて語るときの東の正横綱になり、二一世紀に入って「スクールカースト」という妖怪のようなことばまでつくりだした。

ぼくが「スクールカースト」ということばを嫌いなわけは、子どもの関係を「カースト」というスタティックなものに閉じ込めてしまうからだ。子どもに限らず人と人との関係は一筋縄ではいかない。悪ガキ若本と登校拒否児アッコの関係がそうであったように、つねに揺れ動き、ときに微妙にズレているものだ。それを「スクールカーストの闇」とか「スクールカーストの正体」とかいかにもセンサーシ